

111. 最近の滋賀県下における 発掘調査の紹介

その2

8. 弥生時代の人形土製品を発見

彦根市河瀬馬場町 馬場遺跡

県教育委員会、県文化財保護協会では昭和57年4月から、彦根市河瀬馬場町において県立河瀬高等学校建設に伴う発掘調査を実施してきた。当該地は犬上川と宇曽川のほぼ中央部に位置し、沖積平野を形成するのであるが、現琵琶湖との比高差は少なく湧水地帯である。

調査の結果、素掘の溝跡2条、自然流水路2条、多数の柱穴と多量の土器等を検出した。溝跡は南東から北西にのびるもの(SD1)、その溝と自然流水路とを結ぶ(SD2)で、SD1は幅約3m、深さ0.2~0.3m、長さ55m以上を測り、溝内より多量の弥生土器が出土した。この溝の両側からは多数の柱穴を検出し柱穴には柱根の遺存するものもある。このうち建物としてまとまるものは10棟位とみられ、規模は1間×1間、2間×2間のものである。

自然流水路は柱穴群の東側を南西から北東へ流れる(SD11)と、調査地の北隅を東西に流れる(SD12)もので、SD11は最大幅11m、深さ0.3m、長さ37m以上あり、SD2がこのSD11とつながる。出土遺物は多量の土器と流木等である。SD12は最大幅7m、深さ0.3m、長さ32m以上を測り、土器の出土量は少なく、大足、鋤状木製品の木器の出土をみる。この2条の自然流水路は河川跡とみられ、これらより東側・北側からは建物跡等の遺構は検出されない。

出土遺物には弥生土器、人形土製品、環状石斧、石鏃、砥石等があり、弥生土器は畿内Ⅲ様式からⅤ様式に併行するものと思われ、それ以降の遺物の出土はみない。(滋賀県教育委員会 葛野泰樹・財団法人滋賀県文化財保護協会 徳網克己)



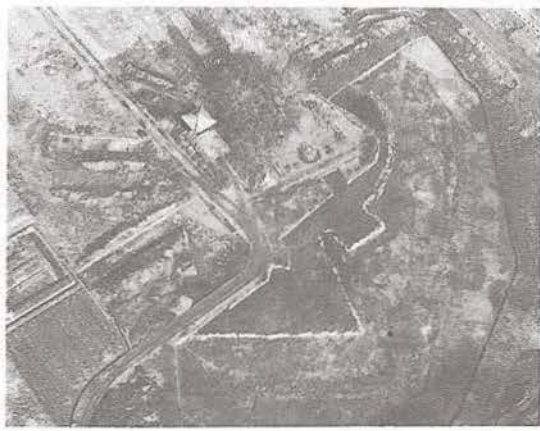
馬場遺跡 人形土製品 協会 徳網克己)

9. 多種類の形象埴輪が出土

近江八幡市千僧供町 千僧供古墳群

千僧供古墳群は、近江八幡市千僧供町を中心に分布する。県下において、平野部に現存する古墳時代中期から後期にかけて連続して造営された唯一の古墳群である。中でも供養塚・住運坊の両墳は、従来より当地方を治めた在地豪族の系譜にかかわる古墳として知られてきた。しかし今回の調査で、これらが単に在地豪族にとどまらず、その造営規格や古式須恵器・埴輪のあり方などからヤマト政権と密接なかわりを有す地方豪族の墳墓であることが明らかとなった。

供養塚古墳は調査の結果、これまで想定された円墳とは異なる帆立貝式古墳であることが判明した。しかも後円部には、幅約4m、長さ8mを測るほぼ長方形を呈する造出しを設する比較的稀な古墳となった。さらに周壕内からは、墳丘部および外堤より転落した多量の埴輪の出土をみた。これらは普通円筒埴輪や朝顔形埴輪を主体に、家(8棟以上)・衣蓋・靱・人物・馬・鶏等の形象埴輪がセットとして検出された。これら形象埴輪は、濠内でも造出しに対峙する外堤側より集中的に認められ、こうしたあり方からいわゆる外区存在が推察された。なお管見において、外区より家形埴輪を出土する例も知られず注目される。また造出しを中心に、ほぼ同一型式の古式須恵器が検出された。これらの祭器は、胎土や製作技法等から在地産とみなし得るものである。したがって近江における須恵器生



供養塚の航空撮影 (写真提供 寿福 滋氏)

産の開始を、これまでの6世紀前半から5世紀後葉として裏付けることが可能となった。一方、住連坊古墳の周濠内からも古式須恵器が検出されて、その型式差から供養塚の前代の首長墳である可能性を強めた。本墳では外部施設は認められず、供養塚古墳の埴輪が窰製である点から、当地方における埴輪生産の窰窯導入期は5世紀後葉の供養塚造営期に求められよう。

(財滋賀県文化財保護協会 岩崎直也)

10. 大規模な複合集落

能登川町神郷字斗 斗西遺跡

斗西遺跡は神崎郡能登川町神郷の斗地先にある。そのすぐ隣には先年調査され、方形周溝、前方後円墳、大量の住居跡などを検出調査した中沢遺跡がある。調査は宅地造成に伴う事前調査として、1982年3月より行われた。

調査の結果、本遺跡は中沢遺跡と同様、弥生時代後期から鎌倉時代にかけて、陸続として営まれた大規模な住居地域であることが判った。それら住居跡は一軒ごとの規模も大きく、かなり有力な人々が居住していたらしい。それらの建物は時代によって造作が変化している。即ち、弥生時代から飛鳥時代にかけては竪穴式の住居でそれ以降は掘立柱式となっている。それら併せて約200棟が検出された。それら建物の単位は、勿論、各時期によって推移があるが、例えば古墳時代中期の住居は3棟前後を1グループとして5単位ぐらい、つまり、一時期約15軒ぐらいの村として存在していたらしい。また、平安時代の掘立柱式の住居では一つの家が3棟の建物を保持しており、そうしたまとまりのある家が5軒発掘された。

かように本遺跡は県下でも有数の大集落であり、先に述べたすぐ隣の中沢遺跡とを併せてみるならば織山を中心とした大きな勢力の本貫地であったかとも見える。従って、本遺跡周辺の水田下にはなお、同様の大規模な遺跡が眠っていると凝視されよう。

(滋賀県埋蔵文化財センター 松沢 修)



斗西遺跡

11. 神崎・条里の手がかり

能登川町小川 宮ノ前遺跡

今回の調査は、ほ場整備・農協施設建設に伴う事前調査である。

当遺跡は、能登川町大字小川集落の西北方面に位置し、猪子山北限より西北に延びる微高地の先端付近に立地する。

検出された遺構は、弥生時代中期～後期にかけてのピット群・同溝、平安時代後期の溝・同自然流路等であった。

弥生時代のピット群については、面的調査でないため、その把握は困難を極める。一方、平安時代の溝は、ほぼ神崎条里と一致しており、条里施行の時期を知る手がかりとなろう。また、赤部八宮神社隣接地からは当社本殿と方向を一にする溝が検出されている。この溝は、条里方向の溝を切って存在し、もし当社関係の溝であるならば、条里施行と当社建立の前後関係が解明される。

各溝・自然流路からは、多量の遺物が出土しており、それらは二つに大別される。一つは、弥生中期～古式土師の一群、今一つは、平安時代後期の土師器・黒色土器・灰釉等である。前者の中には、河内産庄内式土器も含まれている他、個々の遺物に関しては興味深いものがある。しかし、遺構の性格上、遺物を層位的にとらえることができず、誠に残念である。また、縄文土器が出土したことで、今まで知られていなかった同時代の遺跡存在の可能性が生まれたことは、大きな収穫であったといえよう。

(能登川町教育委員会

山本一博)

宮ノ前遺跡ピット群



12. 方形周溝墓を発掘

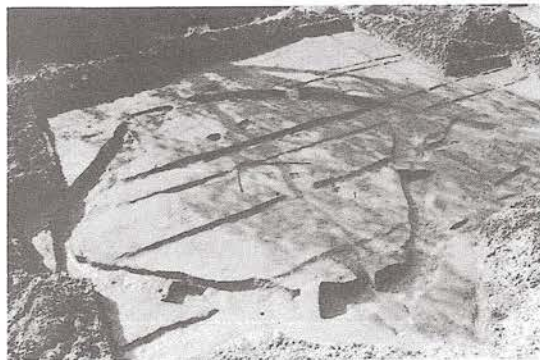
能登川町小川 三敷前遺跡

今回の調査は、ほ場整備・河川改修に伴う事前調査である。

当遺跡は、能登川町中央部を東南から西北に延びる微高地上、大字今と大字小川を結ぶラインのやや小川寄りに立地する。そして、当遺跡の北方限界が、この微高地と考えられる。

検出された遺構は、方形周溝墓2基、中世の水田区画(畔と溝)等である。

方形周溝墓の1基は、一辺7～8mのプランを持つ



三敷前遺跡 方形周溝墓

もので、周溝の深さは約 0.2m である。削平されているため、主体部等の検出はできなかった。ただ、周溝内出土遺物に、縄文時代晩期の遺物が含まれていることが注目された。同遺構と直接結びつかないとしても、付近に縄文時代の遺跡の存在が考えられ、先の宮ノ前遺跡の調査からも、その可能性が増々大きくなる。

一方、中世水田区画に関しては、現在の地割とほぼ一致するという結果を見た。なにぶん、出土遺物が量的に限られており、今回検出の水田区分が、どれ程さかのぼり得るかは不明である。

その他、自然流跡からは、弥生末期の受口状口縁の甕・磨製石斧・石器剥片等が出土している。

(能登川町教育委員会 山本一博)

13. 島川城関連の屋敷跡

秦荘町島川 島川遺跡

調査地は、湖東平野を流れる宇曾川の西南 500m 付近に位置し、16世紀末期ごろより記録的に確認されている島川城指定地内にあり、さらに長塚古墳や大間寺遺跡などに近接していて、当初古墳時代から中近世にかけての遺構の存在が予想された。結果としては、中近世の遺構が中心に確認され、古い時期のものはあまり検出されなかった。掘立柱建物 5～6 棟、柵 4 条、溝 20～22 条等が確認された。主な遺構について概括すると、

〔SB-1〕 調査地南部で検出された建物で、南北 2 間(4.15m)×東西 4 間(8.58m)の規模を有し、南西側に庇を持ち、方位は N39.5°E を示す。この方位は、他の建物や建物群の南東にある数条の溝と共にいわゆる愛知郡条里とほぼ同方位を示している。

建物跡は、微高地である調査地の南側に集中しており溝を境界にして、住居地を形成している模様である。

また、溝も、先にも一部述べたが、建物群と方位を同じくするものがほとんどである。ただ、その中で 1 つだけ方位をかなり異にする大溝が走っている。しかし、時期的には、建物群や他の溝と大差ないと考えている。

以上、島川城地内にあり、時期的にも合致している所から、当調査で確認された遺構は、島川城関連の屋敷跡と考えられる。(秦荘町教育委員会 林 定信)

14. 平安末の掘立柱建物等の発掘

愛知川町市 市遺跡

昭和 57 年 10 月より、愛知川町大字市において団体営業場整備事業に伴う発掘調査を実施した。

調査の結果、掘立柱建物 1 棟、溝跡数条、土壇 1 基等を検出した。

掘立柱建物は 5 間(11.5m)×4 間(9.5m)の南北棟の建物で東側に 2 間(4.5m)×1 間(2.5m)の庇状のはり出しがつく。柱穴は約 0.3m の不整形で、柱痕は 0.15m と小さい。建物の方位は磁北より約 9 度東へ振る。土壇はこの建物内より検出され、東西 0.8m、南北 0.6m の平面楕円形を呈し、深さは 0.2m で底部丸味をおびる。土壇内からは土師器の小皿が 15 点出土し完形品が多い。

溝は建物を取り囲む状態にあり、それを中心に数条の溝が北・南へのびる。幅は 0.5m、深さ 0.2m の素掘りで断面 U 字形を呈する。溝内からは、黒色土器 A 類、土師器小皿、灰釉陶器片等が出土した。この溝はおそらく雨落ち溝かと思われる。遺物は 12 世期頃に比定されよう。

今回の調査で検出した遺構は黄褐色粘質土層の地山を切り込み立地しており、これより西側は砂利層となり遺構は検出されず、遺跡は南・東・北側へ広がる。

当該地の東約 0.5km には奈良時代前期頃創建の野々目廃寺があり、北約 0.5km には古墳時代後期からつづく掘立柱建物を中心とする矢守遺跡がそれぞれ位置する。このことから、これら 3 遺跡は位置、時代的に非常に意義深いものがあると思われ、その相関関係を究明することにより、愛知郡の古代史を明らかにすることも可能かと考えられる。(滋賀県教育委員会 葛野 泰樹・(財)滋賀県文化財保護協会 徳網克己)



市 遺 跡

15. 瓦積み基壇をもつ白鳳寺院

蒲生町宮井 宮井廃寺跡

蒲生郡蒲生町宮井に所在する宮井廃寺跡の発掘調査は、その規模を確認するため昭和55年度より行ったもので、これまでに軸をほぼ真北にし、およそ1.5町(162m)四方の寺域を持つことが判明した。本年度は本寺院跡の伽藍配置を確認すべく、寺域内の神社地、畑地等を発掘調査した。その結果、四ヶ所で建物跡を確認した。まず、寺跡の東西中軸線上の南より北の位置で塔跡と目される42尺(12.675m)四方の石積み基壇を持つ建物跡を確認した。その基壇上には側柱、四天柱の礎石14個(心礎は北東の社地内に埋置されている)が原位置で遺存していた。その塔跡北東の社地内では内容は不明だが、東西56尺(16.8m)、南北38尺(11.4m)以上の瓦積み基壇を持つ建物跡を、また、その西方の畑地で階段を有する石積み基壇建物跡の外郭の一部をそれぞれ確認した。このことから、本寺院跡は南北中軸線上に主に塔、礎石建物跡を、その空間の東西に瓦積み、石積み基壇を持つ建物を配した伽藍配置である事が判明した。なお、出土遺物は大半が瓦で雷文系複弁16葉・単弁8葉蓮華文軒丸瓦、重弧文軒平瓦等、軒瓦も多く含まれている。その他に県内で数例しか出土していない塑像仏、泥塔や銅製品、釘があり、ほぼ白鳳時代以降の遺物とみられる。

このように本寺院跡は白鳳時代の創建とみられるが、それら建物跡以外の施設、あるいはそれらの規模等については今後の調査にまつ必要がある。

(蒲生町教育委員会 北川 浩)

16. 官衙跡か

蒲生町寺 七ツ塚遺跡

蒲生郡蒲生町寺に所在する七ツ塚古墳群は、長谷野丘陵と鏡山丘陵とにはさまれた桜谷丘陵の西端に近い微傾地にある後期古墳で、墳丘高2m位の古墳が数基現存している。

今回この古墳群に隣接した地で県営ほ場整備事業が行われる事となったため、事前に発掘調査を行った。結果、本古墳群に関する遺構・遺物は何ら検出されなかったが、奈良時代から平安時代の遺構が検出された。その遺構は東から北西に自然流水路が流れ、その右岸で2間×5間の南北棟に、西・北面に庇をもつ掘立柱建物跡(SBO1)・その北に2間×2間の総柱建物(SBO2)・その一群の下流で2間×3間の東西棟(SBO3)と2間×2間(SBO4)の総柱建物跡等が検出された。SBO1は、柱間寸法、2.10~2.30m、掘方70~100cmと規模が大きい。また、周辺には、奈良時代中期から平安時代初期にかけての遺物が多く出土して

おり、この時期の建物群と想定出来る。以上のことから、やや一般の集落跡とは違う、官衙的な様相を示す。来年度は、その南西の高位で調査を予定しており、本遺跡の性格が解明される事を期待するものである。

(蒲生町教育委員会 北川 浩)

17. 日野地方の方形周溝墓

日野町内池 内池遺跡

当遺跡は日野町内池字里口に所在し、蒲生町から日野町に続く平野部のほぼ入口にあたり、北に小御門古墳群等の遺跡が存在する小御門丘陵をひかえ、北西方向に流れる出雲川により形成された氾濫原に位置する。調査は昭和57年度県営ほ場整備事業に先立ち前年度に引き続き実施し、対象面積は約4000㎡で10月から2月の約5ヶ月を要した。遺構は対象面積のほぼ全面に遺存し、弥生時代から鎌倉時代にわたる複合遺跡である。対象地域の中央南よりに方形周溝墓が、周溝を接するように5基検出された。規模は一辺4mから7mである。周溝は浅いもので30cm、深いもので1mで、ほぼ全周をめぐるが一箇所に陸橋部をもつものがある。主体部はいずれも削平のため確認されなかった。周溝内は2~4層の埋土があり、最下層より弥生時代中期後半の壺形土器が出土している。当遺跡で大半を占めるのが、古墳時代後期の竪穴住居跡で計16棟確認された。形態は隅丸方形で、一辺3m前後がほとんどで大きいものでも4m余りである。すべての住居跡にはカマドの施設があったものと思われるが、削平が著しいため確認できたのは11棟であった。また、この頃の屋外カマドも一箇所検出されている。竪穴住居跡に続いて多いのは掘立柱建物で、1間×2間のものから2間×4間のものまで10棟確認された。この中には、2間×2間から3間×3間の倉庫と思われる総柱建物が4棟含まれる。時期は、柱穴内より出土した須恵器より奈良時代である。この時期の土器も検出され、緑釉埴が1点出土している。平安時代より鎌倉時代にかけての土器も検出されており、土師器などの土器溜りとなっている。以上、内池遺跡の概要を述べたが、方形周溝墓は日野町で確認された最古の遺構で、内池遺跡が所在するこの付近一帯の平野部が、日野町では比較的早くから開けていたことが推定される。

(日野町教育委員会 日永伊久男)



内池遺跡